

10 原尻地域の景観

①原尻地域の概要

1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領上自在組。原尻村、上自在村から成る。
明治 8 年(1875)	原尻村となる。
明治 22 年(1889)	町村制実施により、南緒方村大字原尻となる。
昭和 25 年(1950)	町制施行により、緒方町大字原尻となる。
平成 17 年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町原尻となる。

2 主な出来事

古墳時代	六箱横穴が造営される。
寿永 2 年(1183)	二宮八幡社造立（伝承）。
12 世紀後半	緒方下井路の原型井路が完成。
正保 2 年(1645)	原尻古井手開鑿。
承応 3 年(1654)	野仲井手竣工（現、三区井路）。
元禄 8 年(1695)	原尻古井手改修（上戸の隧道完成）。
天保 2 年(1831)	六箱横穴墓から、馬具（轡 2 組）や直刀が発見される。
天保 4 年(1833)	岡藩の指示で後藤伊賀守貞宗碑が建立される。
明治 14 年(1881)	野仲井路取水口付近を岩盤掘削し現在の井路の形になる。
明治 33 年(1900)	原尻新井路竣工。
大正 10 年(1921)	野仲井路堰堤をコンクリート造りにする。
大正 12 年(1923)	原尻橋（5 連のアーチ式石橋）竣工。
昭和 29 年(1954)	原尻の滝上に大鳥居完成。
昭和 50 年(1975)	県営圃場整備緒方川左岸圃場整備完了。
昭和 51 年(1976)	県営圃場整備緒方川右岸圃場整備完了。
昭和 54 年(1979)	原尻公民館完成。

3 原尻地域の構成・人口など

組合名	上戸、原、平、阿弥陀、二ノ宮、大橋
戸数・人口	62 戸、147 人（令和元年 12 月）

②江戸時代の圃場の様子～岡藩主による田植見物～

原尻地域の右岸は、江戸時代には原尻古井手開鑿により水田化しており、岡藩主による「御覧田植」が行われるほどの圃場であった。御覧田植は、岡藩庁により企画された大規模な行事で、藩主の重要な地方巡検であった。上自在組原尻村小庄屋の羽田野長蔵が大正 11 年に記した「藩政時代之雑事」（昭和 43 年に『岡藩時代之雑事』として復刻）に状況が詳しく記されている。緒方盆地の水田が、岡藩にとって重要な位



写真 96 「藩政時代之雑事」

置を占めていたことがわかる貴重な記録なので、以下、『岡藩時代之雑事』から引用する。

「安政七年四月二十八日、原尻村にて田植見物あり。御休息所は二宮八幡社前東側に仮小屋を作りて之に当てたり。長さ五間巾二間二階造四室、白木材にて新築し、二階の一室を御居間とし他は随行の詰所なり。殿様の飲食物は御殿より持参、随員数十人分は現地にて作製せり。御一行中乗馬は十五人、他は徒歩なり。前日より出張の役人数人あり。下役人庄屋の事務所並びに休息所は神社々殿又は境内所々に新しき菰を引き廻し設置せり。田植方、しろかきは地方各村より選別せし百二十疋の牛、鞍飾り等揃ひのものを使用し、植手は緒方郷各村より男女各二百人の上手を選び、揃ひの笠たすきに身をかためたり。植手十人に一人の世話人あり。庄屋総指揮に当たり、しろかき、植方の配置より、田植始め、終りの号令の下に規則正しく行う。田植技術優秀な者に賞詞あり。慰労として賜りの酒の祝宴は御仮屋をはじめ神社境内、滝の上河原、又は路傍等随意の場所にて一同一酔にて、何の御とがめなし。墨塗り、突当等、男は女に、女は男に、袖に隠した墨を顔面にぬり、又泥のままなる稲苗を打ち付ける等大変なる賑わいなり。諸費用の幾分は下賜あるも多くは地方負担にて迷惑なる事なり。安政四年上自在村及井上村にて田植見物ありたり。」

③原尻地域を潤す井路と水田景観の成立

緒方川は、蛇行しながら牧原・上年野・辻集落を經由し、辻の津留あたりから真北に流れを変え、原尻の滝あたりで大きく東方向へ流れを変える（写真 97）。緒方川により形成された段丘面は3段あり、原尻集落は第2段丘の上端に形成されている。集落の前面には、平坦な圃場が広がり、集落の後背地（東）側には棚田が形成されている。なぜこのように圃場に囲まれるように集落が形成されているのか、井路の開発史をたどりながら考察する。

原尻地域は、緒方川右岸に大多数の集落が形成され、緒方川左岸の原尻（倉園下、ケンバ）地域にも若干の集落が形成されている。緒方川をまたいで同一の集落を構成するのは、緒方盆地内では原尻集落だけである。緒方川右岸の原尻地域内には、原尻古井路・三区井路（野仲井路）・原尻新井路の3つの井路が流れている。三区井路の原型は、承応元年に開鑿が始まった野仲井手である。現在は、主に小野区・野仲区・知田区の三つの自治区が管理するため、三区井路と呼ぶ。緒方川左岸には、辻の蜘蛛迫から取水する緒方上井路、原尻の滝のすぐ上流から取水する緒方下井路の2つの井路がある（図 65）。合せて5本の井路が、緒方盆地の右岸・左岸の圃場、約255haを潤している。それぞれの井路が潤す圃場を現地確認し、色分けしたものが図 65である。まず、正保2年(1645)に原尻古井路（現、原尻古井路）が開鑿され低地の第2・3段丘が水田化した。次に、承応3年(1654)野仲井手（現、三区井路）が竣工し、野仲の平坦地が水田化した。現在原尻の第3段丘内には三

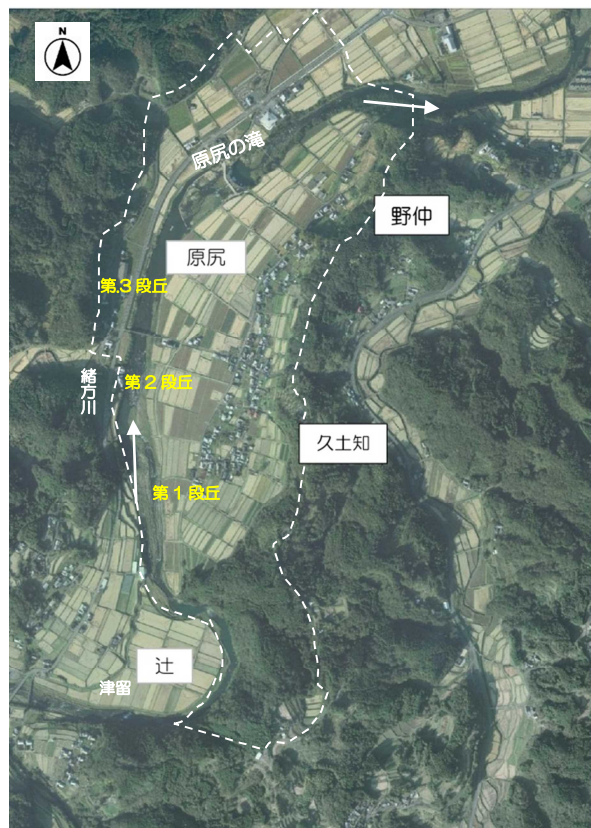


写真 97 原尻地域の位置図

区井路により灌漑される圃場（紫色に着色）があるが、承応3年の野仲井手開鑿当時に、この井手によって灌漑されたかどうかは不明である。そして、柚木井路が牧原の「くりゅう曲がり」から延長され、明治33年に原尻新井路として竣工した。原尻と久土知境の尾根に井路が通り、原尻集落の背後地である畑（第1段丘）が水田化した。こうして原尻集落は、家並みの前後を水田に囲まれる景観ができあがったのである。

原尻地域でも、緒方川上流域の牧原・上年野・辻地域と同様に、明治以降、土木技術が発達したことにより、畑地が水田化した状況を確認することができた。集落全面に広がる水田の景観は、一つの井路により形成されたものではなく、長い時間をかけて複数の井路が整備され形成された景観なのである。



写真 98 原尻集落の前後に広がる圃場

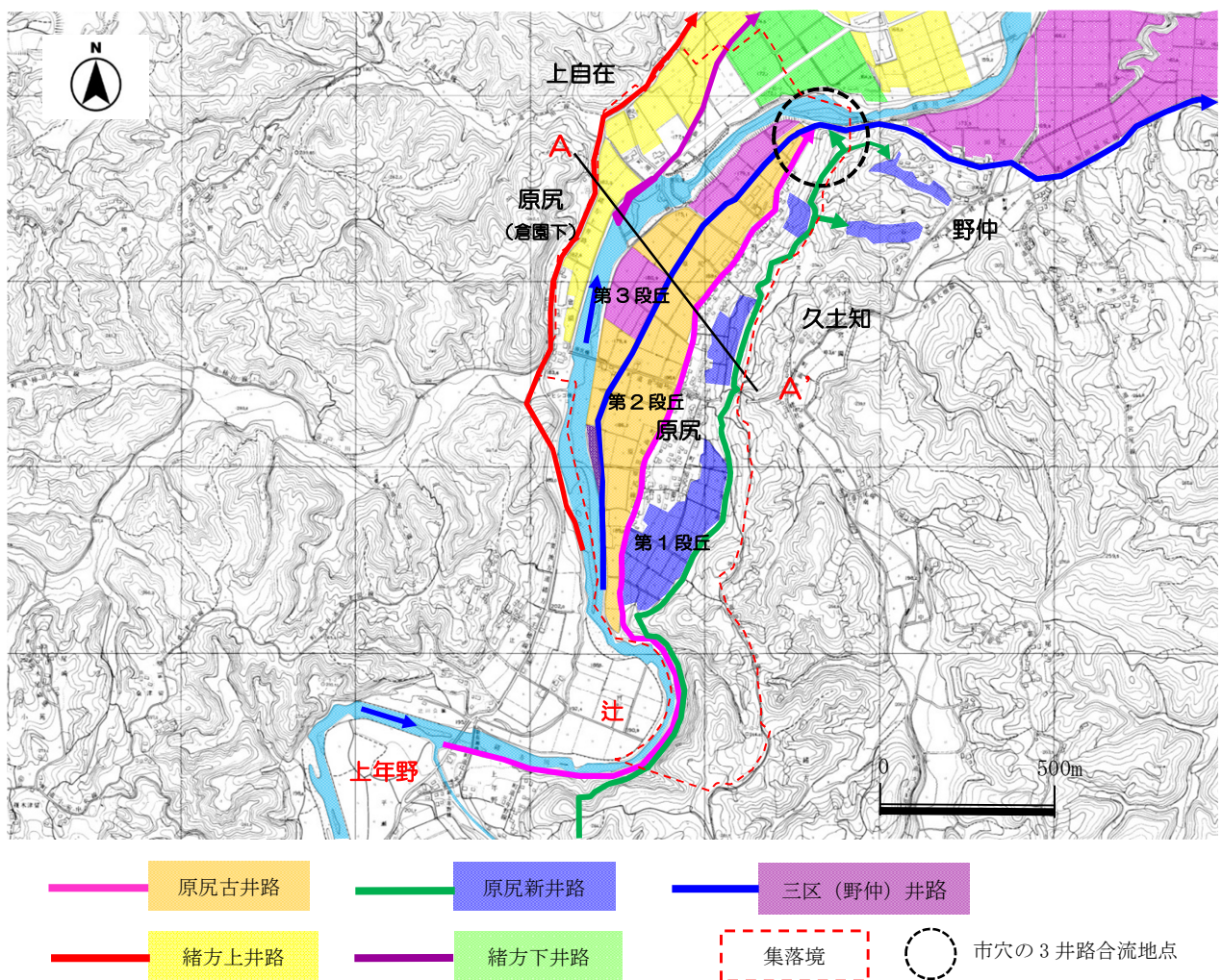


図 65 原尻地域を潤す井路と圃場の塗り分け

④旧字図から見る原尻地域の圃場

図 66 は、明治 21 年調製の原尻地域の字図である。「畑」地目を修正し「田」と書き替えられた筆を黄色で着色した。この書き替えは、明治 33 年以降に原尻新井路が通水し、畑地が水田化したことによる。明治 21 年当時の「田」地目には緑で着色、「宅地」は赤で着色した。ピンク色の線は、明治 33 年に通水した原尻新井路の路線である。原尻新井路の開通により、原尻集落の南側傾斜地の景観が「畑」から「田」へと劇的に変化したことがわかる図面である。

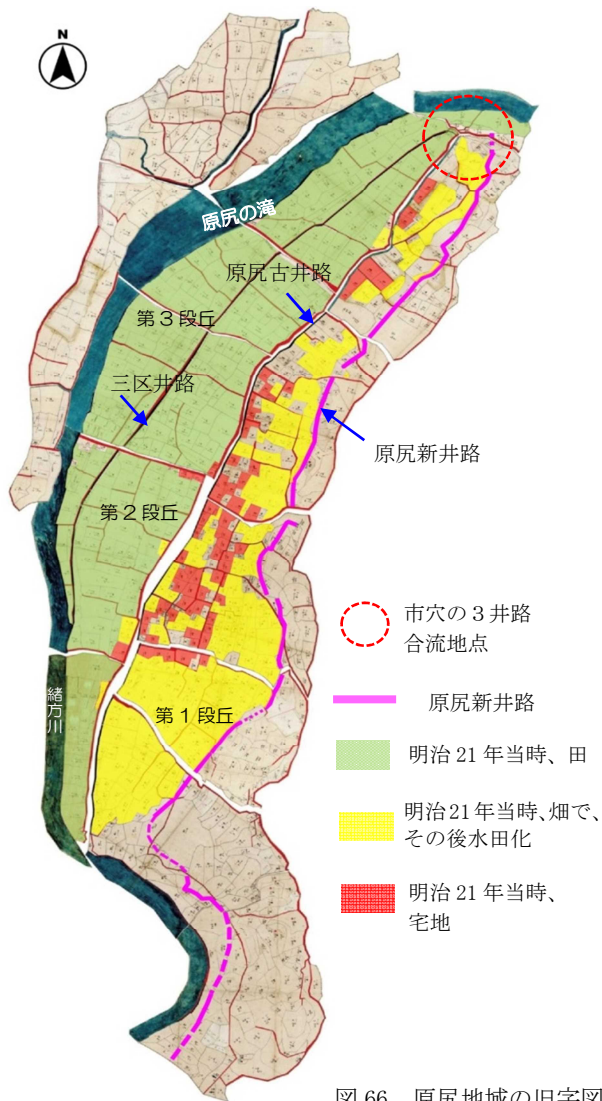


図 66 原尻地域の旧字図

⑤緒方川右岸を潤す三本の井路の合流

緒方川右岸を潤す三区井路（野仲井路）・原尻古井路・原尻新井路は、原尻字市穴で合流し、三区井路 1 本となって、原尻地域よりも下流の野仲・小野・知田地域を潤す（写真 99）。

それぞれの井路を結合し、下流域に大量の水を送り水田を維持している。水を無駄にしない見事な仕組みである。



写真 99 三区井路・原尻古井路・原尻新井路の合流地点（市穴）

⑥原尻地域の断面模式図と圃場整備前の景観

図 67 は、緒方川右岸の原尻地域の断面模式図（図 65 A-A' 間）である。緒方川右岸の三つの井路、緒方川左岸の二つの井路、集落の位置関係を示したものである。

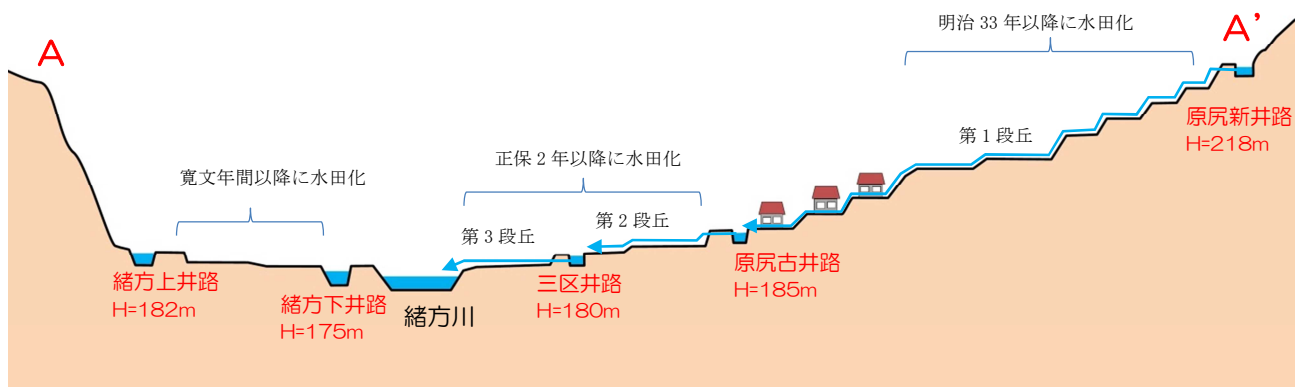


図 67 原尻地域の断面模式図

写真 100 は、原尻地域の圃場整備前の空中写真（昭和 51 年）である。原尻古井路の流れを基軸として直交方向に条里型地割のような区画が見えるが、圃場整備後にはその痕跡は全くない。

写真 101 は、原尻新井路本線の水口と圃場内支線の水栓である。通常の圃場では流れ込み式の

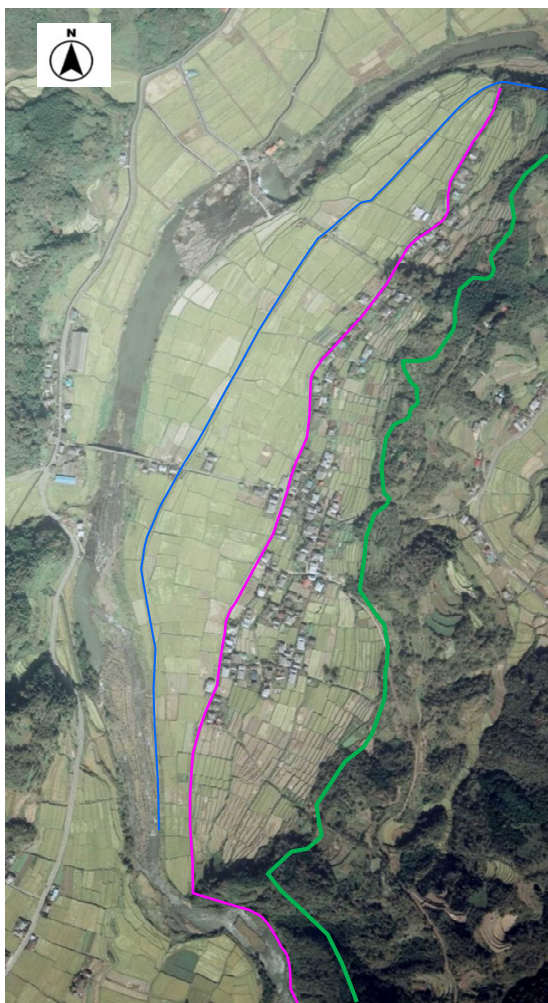


写真 100 圃場整備前の原尻地域（昭和 51 年 国土地理院）

小井路が地表面に見えるが、原尻の棚田の場合、小井路は地下にパイプが敷設されており、それぞれの圃場には水栓が設置されている。小井路にかかる草を切る手間が省けるが、井路本線に流れ込んだ落ち葉などが地下にある



写真 101 取水口の筒網（上）と圃場の水栓（下）

導水管やバルブに詰まらないようにするため、取水口に筒網を付けるなど、特殊な構造になっている。緒方盆地の圃場では珍しい構造である。

⑦三区井路堰堤・取水口付近の景観

写真 102 は、三区井路堰堤と取水口付近の空中写真である。緒方川の河床が、水流により侵食され多数の筋状の溝が形成されている。三区井路は、承応 3 年に開鑿された野仲井手が原型である。野仲井手の堰込み取入口から下流方向へ 120 間（約 216m）は、全て板堰であったが、毎年多額の修理費と維持管理の煩雑さに耐えられず、明治 14 年に巨費を投じて岩盤を掘り割り「堅盤掘鑿水路」（写真 103）へと改修を行った。その結果、堅牢な水路は、ほとんど破損することがなく現在に至っている。



写真 102 三区井路（野仲井路）と緒方上井路と堰堤・取水口



写真 103 三区井路の掘り割り



写真 104 長鑿の跡

図 68 は、取水口周辺の測量図である。測量に際して、井路開鑿工事の痕跡を確認し図面に落とし込むようにした。その結果、板堰で導水していた頃の柱穴を多数確認できた。また、明治 14 年の開鑿工事の際に、長鑿で岩盤に穴をあけ、おそらく火薬を詰め岩盤を爆破したであろう長鑿痕を多数確認できた（写真 104）。予想外であったのは、緒方川の中ほどにある岩盤に、ほぼ一列に並んだ夥しい数の柱穴痕を確認したことである。野仲井手開鑿当時の柱穴と思われる。

岩盤に約 200m に亘って掘鑿された井路と岩盤を掘り割るための長鑿痕（図 68）、板堰を設置した柱穴群は、井路開鑿時の技術と人々の熱意を伝える貴重な遺構である。また、現在も滔々と水が流れる様は、人々の生活を支える井路の取水口として極めて重要な景観となっている。

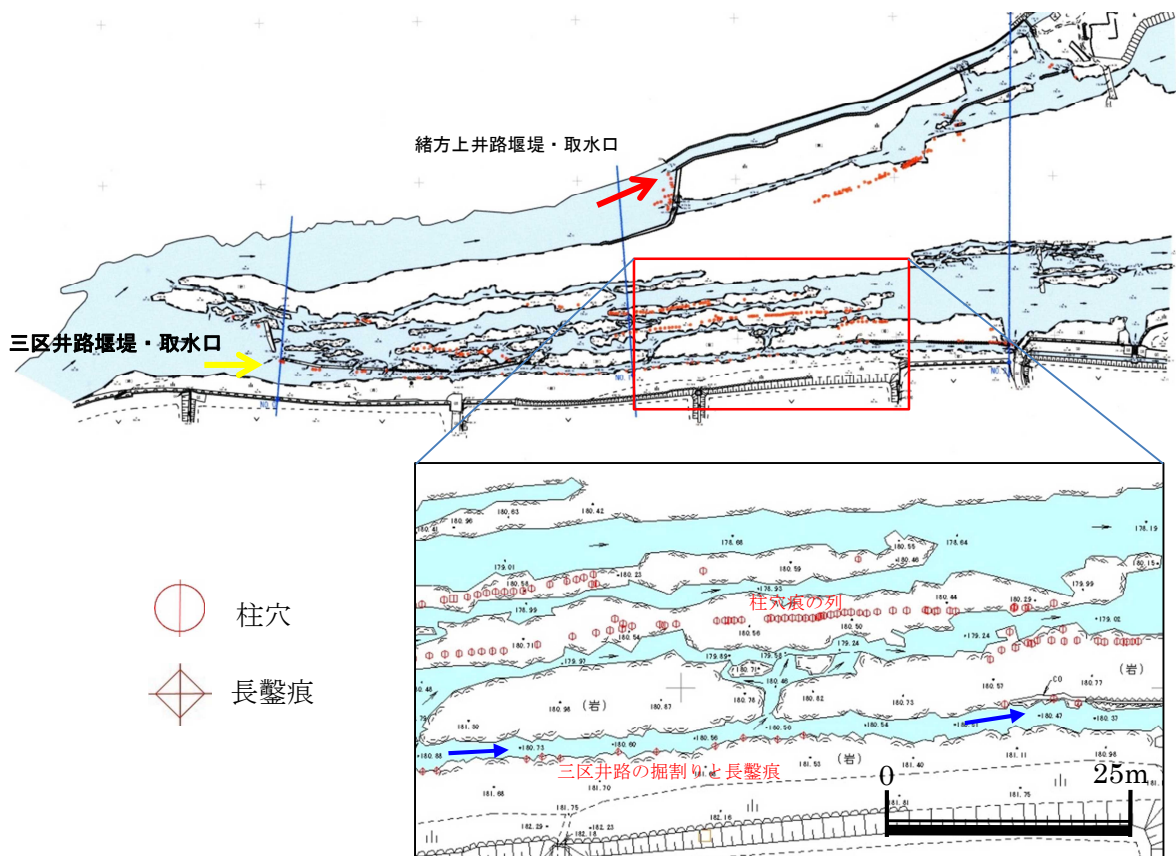


図 68 柱穴痕と長鑿痕の列

⑧原尻の滝と緒方下井路周辺の景観

原尻の滝は阿蘇 4 火砕流堆積物の強溶結凝灰岩が侵食されて形成された。滝は馬蹄形を成し、弧の部分の延長約 120m で、高さは約 15m である (写真 105)。滝上にはコンクリート製の市道が渡っており、滝を上から見下ろすことができる珍しい場所である。豊後大野市内で最も多くの観光客が訪れる場所で、滝周辺の圃場には 11~12 月にチューリップの球根が植えられ、4 月にチューリップフェスタが開催される (写真 106)。緒方三社川越し祭り (井路を崇敬する祭礼) の舞台

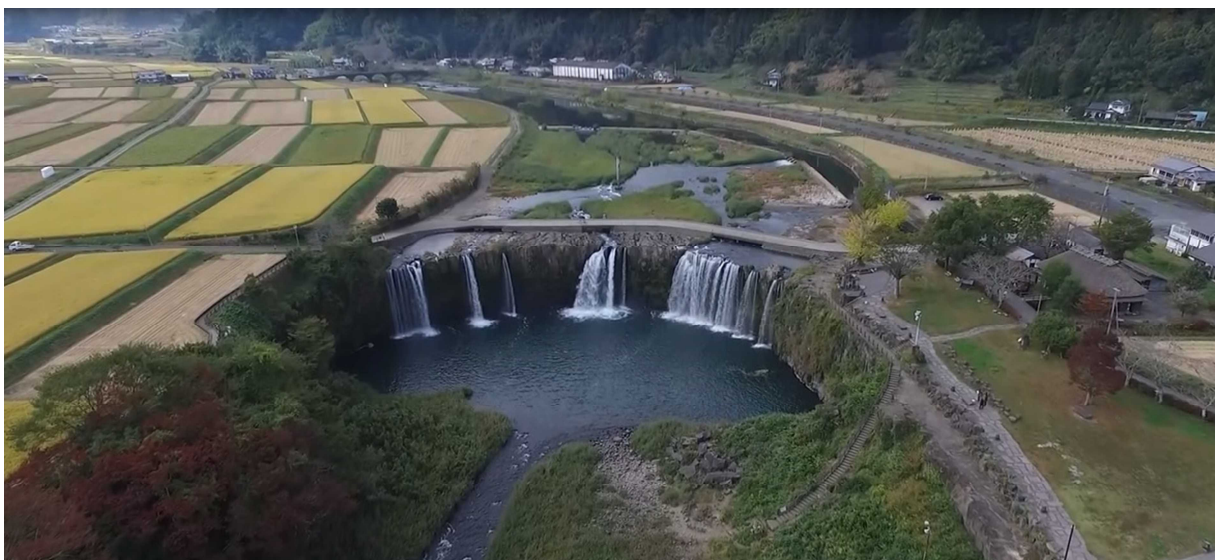


写真 105 原尻の滝

でもあり、豊後大野市内で最も多くの観光客が訪れる。阿蘇火山の巨大噴火と火砕流堆積物の状況がよくわかる場所として、おおいた豊後大野ジオパークのジオサイトにも選定されている。緒方井路開鑿史や緒方三社川越し祭りについては、「第3章 第2節」「第4章 第5節」に詳しいので、ここでは滝本体と周辺にある景観を構成する要素について記述する。

原尻の滝から下流は、緒方川の水流によって河床が侵食され、深い箱状の谷となっている。原尻の滝よりも下流域の水田は、深い緒方川から水を引くことができないので、原尻の滝の上流約175mの場所に堰堤を築き導水している。これが緒方下井路である（写真108）。

下井路の堰堤は、緒方川右岸から左岸の滝上排水門（写真108中、赤○）まで延長約210mの長さで、堰堤高は約1mである。

緒方下井路の滝上排水門から右岸方向を眺めたとき、川中に大きな鳥居が見える（写真107、写真108の黄○）。これは、緒方三社川越し祭りの際に、三宮八幡社の神輿が渡河する「神の渡る道」に設けられたものである。大鳥居は昭和29年（1954）に設置されたもので、目的は「緒方三社川越し祭りの際の御幸聖路として、氏子の信仰を深

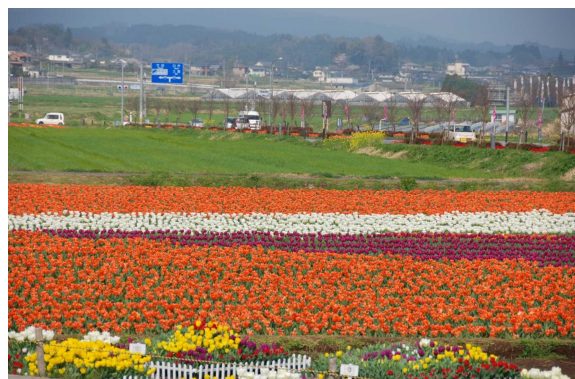


写真106 原尻の滝周辺の状況



写真107 原尻の滝上の大鳥居

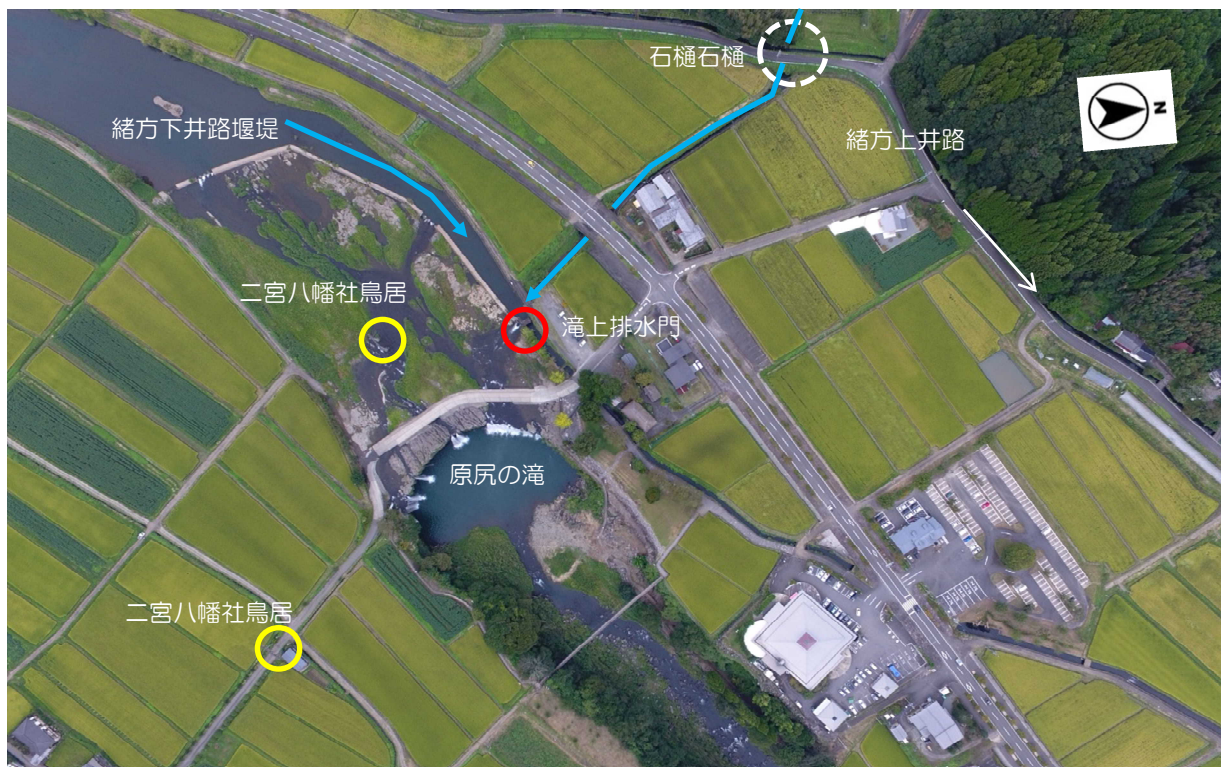


写真108 原尻の滝と周辺の要素

かからしめんため。緒方三社鎮座七百七十年を記念して。緒方町観光の一翼として。」(『続緒方町誌』より)ということである。令和2年(2020)から66年前の建立であるが、原尻の滝の景観として馴染んでいる。

原尻の滝から上流へ約510mの地点には原尻橋がある(写真109)。大正12年(1923)に建設されたもので、建設の由来を記した記念碑はないが、上流の長瀬橋(大正12年建設)、下流の鳴滝橋(大正11年建設)が、豊肥線鉄道緒方駅開業を契機に速やかな物資運搬を目的として建設されているので、原尻橋も同様であろう。欄干には、原尻地域や近隣集落、運送会社などの寄付者名・寄付金額が記されている。豊肥線鉄道緒方駅開業を契機として、緒方川に架けられたアーチ式石橋の一つであり、緒方盆地の近代化を物語る重要な景観の要素である。現在、盆供養の行事「コダイ(小松明)」の際には、アーチや欄干に松明が灯され、人々に愛されている石橋である。



写真109 原尻橋とコダイ(小松明)



写真110 建設中の原尻橋

⑨原尻古井路と緒方上井路のクンバ(汲ん場)

原尻古井路は南から北に向かって流れ、古井路に沿って立ち並ぶ民家のほとんどは、表玄関が東か南を向いている。古井路は住宅の裏側か側面方向にあるので、裏玄関や勝手口を抜けクンバ(汲ん場=汲み場)に出ることになる。敷地内から段を降りて利用する汲ん場が多い(写真111、112)。現在では水環境に悪影響を与えるようなものは洗っておらず、鍬や鎌などの洗浄で使われる程度であるが、古井路に造られた汲ん場は21カ所(写真113)にも及ぶため、原尻集落の景観の特徴の一つとなっている。また辻(倉園)地域には5ヶ所の汲ん場がある。原尻集落の環境保全に関する意識は高く、昭和25年頃から「蚊も蠅もない運動」や「雑水等の水路への流し込み禁止運動」による里づくりに努めてきた。原尻集落では、平成7年から10年まで農業集落排水整備事業が実施され、井路に生活排水が流れ込まないようにした。これは、緒方川の水質保全にも寄与している。



写真111 現在の汲ん場の様子

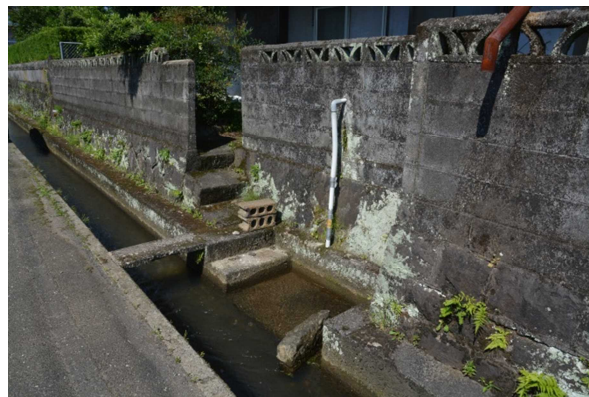


写真112 現在の汲ん場の様子



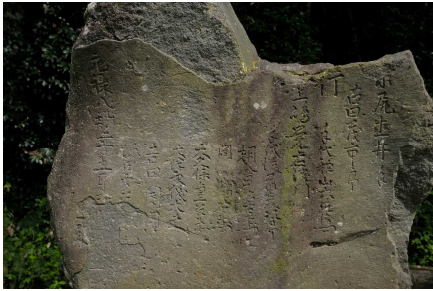







写真 113 原尻地域の汲ん場位置図

⑩原尻地域の景観の要素


原尻地域は、江戸期の原尻古井手や野仲井手の開鑿で緒方川沿いの第2・第3段丘が水田化した。明治になり原尻新井路開鑿・延長工事により、第1段丘部分が水田化し、今では原尻地域一面が水田化した景観になっている。原尻地域でも、牧原・上年野・辻地域と同様に、明治以降、土木技術が発達したことにより、畑地が水田化した状況を確認することができる。集落全面に広がる水田の景観は、一つの井路により形成されたものではなく、長い時間をかけて複数の井路が整備され形成された景観なのである。以下に、人々が造り上げてきた景観の構成要素を掲げる。

表 15 原尻地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	上戸石風呂 (県指定有形 民俗文化財)		入口は幅 70 cm、高さ 90 cm、奥行き 130 cm、で内部は 5 m ² である。床面には河原石が敷き詰められ、火熱が行き渡るように数条の火道が掘り込まれている。明治時代に造られたと思われる。現在は使用されていない。
2	原尻古井路の隧道		元禄年間に原尻古井手の改修工事が行われ、凝灰岩の岩盤を掘り貫き、井路を開通させた。この隧道はコンクリートの護岸に改修されている。
3	原尻古井路の石碑		原尻直井手 奉行 古田茂一郎 上嶋覚右衛門ほかの連名で、元禄 8 年 (1695) に建立された。原尻古井手のトンネル工事の記念碑と思われる。「直井手」や「奉行」の文字から岡藩直営の工事であったことが推察される。 (□は欠字を補ったもの)
4	三区井路の堰堤と掘り割り		緒方川の右岸の圃場を潤す三区井路の取水口付近。明治 14 年に凝灰岩の岩盤を掘り割り、用水路とした。近代になって井路を開発する工法がよくわかる場所である。

番号	要素名	写真	説明
5	原尻新井路		原尻新井路は、原尻地域を灌漑するため、明治33年以降、柚木井路の末流から新たに開鑿された。写真は原尻新井路と水口。新井路から圃場には、地下に敷設されたパイプを使い灌漑する。
6	後藤伊賀守貞宗碑 (市指定有形文化財)		天保2年に横穴墓を掘り当てた者が、内部から轡と直刀1本を発見した。自分の先祖の後藤伊賀守の物ではないかと岡藩庁に届け出たところ、丁寧に保管し石碑を建てるよう指示を受けた。後藤家・羽田野家により今も守られている。なお轡・直刀は古墳時代のもので、現在豊後大野市歴史民俗資料館に保管されている。
7	原の石風呂 (市指定有形民俗文化財)		原尻新井路が開通した明治33年以降に造られたものか。内部からは原尻の圃場集落が見渡せるので、入浴時は心地よい眺めであっただろう。
8	原尻古井路の風景		民家の脇を流れる古井路。水環境に悪影響を与えないものしか洗わない。草取り鎌・選定ハサミ・鋸を洗っている風景。
9	原尻簡易郵便局とポスト		昭和38年に簡易郵便局として業務を開始した。昔ながらの円筒形の郵便ポストが現在も使用されている。前を流れる原尻古井路には、汲ん場も設置されている。

番号	要素名	写真	説明
10	阿弥陀堂 愛宕様 お大師さま		原尻簡易郵便局前の道路を挟んだ向かいに右から阿弥陀堂・御大師様・愛宕様と並んでいる。阿弥陀堂があるので組合名が阿弥陀と呼ばれる。御大師様は安政3年(1856)に建てられたとされる。愛宕様は下方の田にあったが圃場整備の折に現在地に移動した。昔は行者が来て火伏せの祭りがされていた。
11	原尻橋		大正12年に建築された5連のアーチ式石橋で、橋長は73m、橋幅は4m。豊肥線鉄道緒方駅開業が契機になり、交通の便を良くするため建築された。8月の盆行事「コダイ」の際には、アーチ・欄干に松明が灯される。
12	緒方下井路堰堤		緒方下井路の堰堤は板堰であったので破損することが頻繁であった。大正8年にコンクリート製に改築した。その後も改修が行われ現在に至っている。
13	緒方下井路 滝上放水門		上から見ると、漏斗の断面のような形をした緒方下井路堰堤は、緒方川の水と石用川の水を合流させて下流域へと送水されている。合流地点のすぐ下流には滝上放水門が設置されており、増水時の緊急放水に対応している。
14	緒方下井路の旧排水門 (2連アーチ式石造り)		旧滝上放水門の一部で、現在の放水門よりも約28m下流にある。放水場所の移動に伴って、現在は使用されていないが、2連アーチの水門が残っており、汲ん場も設置されている。

番号	要素名	写真	説明
15	緒方井路堰堤之碑		<p>碑文には、「緒方下井路の堰堤は板堰であったので破損することが頻繁であった。大正8年にコンクリート製に改築した。」旨が記されている。</p>
16	鳥居之碑		<p>昭和29年に、原尻の滝上の河原に大鳥居が建立された。目的は「緒方三社川越し祭り際の御幸聖路として、氏子の信仰を深からしめんため。緒方三社鎮座七百七十年を記念して。緒方町観光の一翼として」である。</p>
17	原尻の滝 (市指定名勝)		<p>馬蹄形をなし、弧の部分は約120m、高さは約15mである。阿蘇火山が9万年前に巨大噴火を起こし、その際の火砕流堆積物が強溶結し岩盤を形成した。冷えるにつれて岩盤に亀裂が多数入り、長年の水流で崩落し形成された。滝上には緒方下井路取水口があり緒方盆地の水田を潤す。周辺には緒方三社があり、人々の崇敬を集めている。11月末から12月初旬、緒方三社川越し祭りの舞台となっている。</p>
18	二宮八幡社の 大鳥居 (原尻の滝上の 川中)		<p>昭和29年に建立。目的は「緒方三社川越し祭り際の御幸聖路として、氏子の信仰を深からしめんため。緒方三社鎮座七百七十年を記念して。緒方町観光の一翼として」と鳥居之碑に記されている。高さ9.7m、幅6.7mで額束には「八幡宮」と刻まれている。</p>

番号	要素名	写真	説明
19	二宮八幡社の 大鳥居 (二宮八幡社への 参道)		この鳥居がある場所には、以前は石造りの鳥居があったが、道路狭小で交通の便が悪いため、二宮八幡社境内に移された。原尻在住の古庄定氏が、参道に鳥居がないことを淋しく思い、昭和54年に2月に建立し寄進した。額東には「二ノ宮八幡宮」と刻まれている。
20	二宮八幡社太鼓橋		建設年代は不詳であるが、江戸期と推測されている。二宮八幡社の参道となるアーチ式石橋である。
21	二宮八幡社		神殿は嘉永元年(1848)に新築されている。一宮八幡社が仲哀天皇、二宮八幡社が応神天皇、三宮八幡社が神功皇后を祀る。緒方三社川越し祭りでは、一宮八幡社と三宮八幡社の神輿が出会う場所として、祭りの中心となる神社である。
22	市穴石風呂 (県指定有形 民俗文化財)		明治の初めまで使用されていたといわれており、床面は片面平たがね仕上げ、周囲はノミで仕上げている。町内の石風呂の中では造成の掘削年代が古いと考えられている。入口は長年の風化で楕円形に広がっている。浴室内部は約6㎡で、内側には、蒸気を室内に保つためムシロなどを垂らしたと思われるほぞ穴が穿たれている。

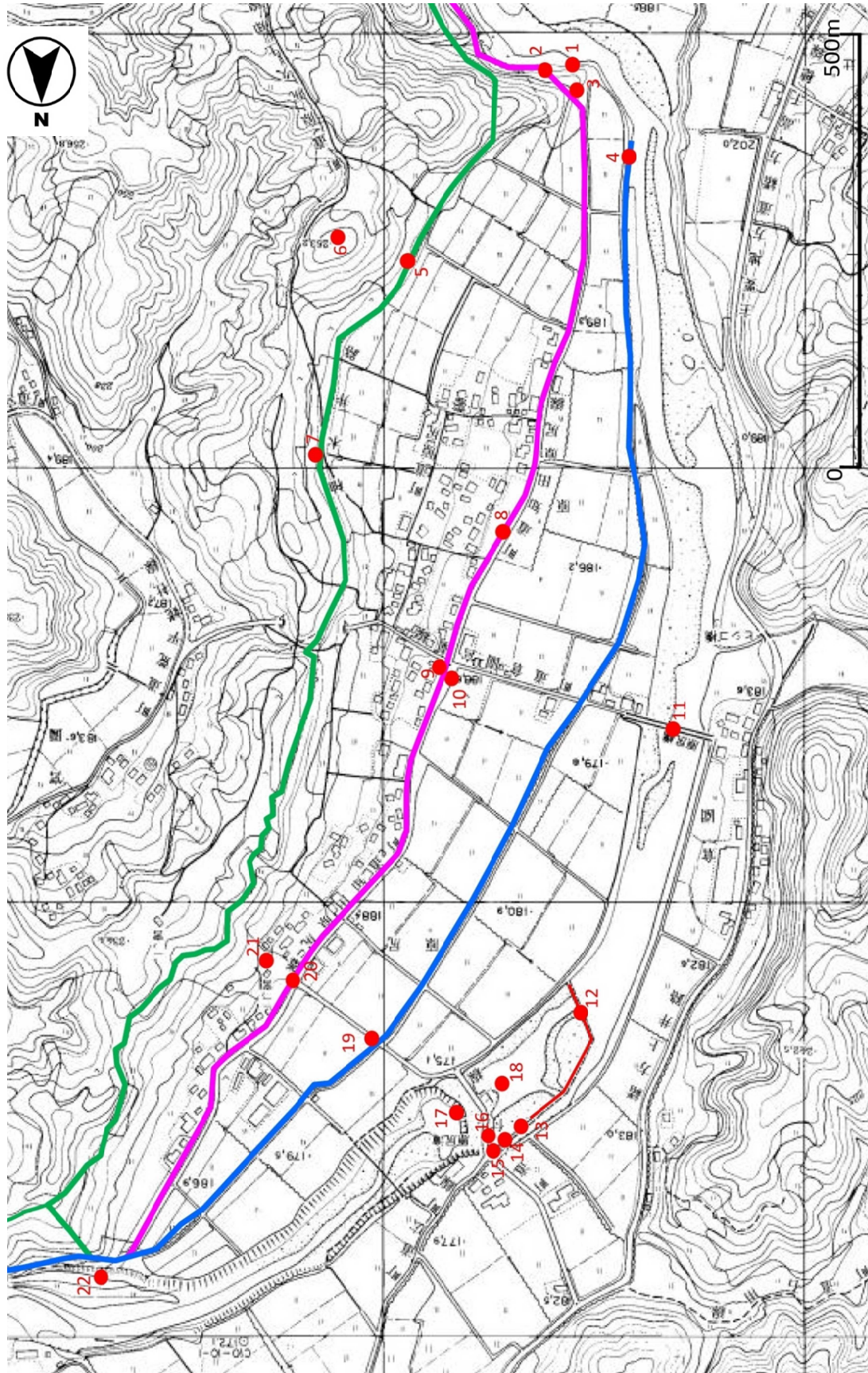


図 69 原尻地域の構成要素の位置図